

〈小学校 社会科〉

社会科を核とした国際理解教育の工夫
— 体験的学習を通して —

糸満市立潮平小学校教諭 宮城しのぶ

目 次

I 研究テーマ設定の理由	1
II 研究仮説	1
III 研究構想図	2
IV 研究内容	3
1 国際理解教育についての考え方	3
2 問題解決的学習	5
V 授業実践	5
1 単元名	5
2 単元設定の理由	5
3 単元の指導目標	6
4 単元の指導計画	7
5 本時の指導計画	8
6 授業の考察	9
VI 研究の成果と今後の課題	10

〈小学校 社会〉

社会科を核とした国際理解教育の工夫

— 体験的学習を通して —

糸満市立潮平小学校教諭 宮城しのぶ

I 研究テーマ設定の理由

情報化社会となった昨今、欧米諸国のみならず開発途上国に関する知識も得られるようになってきた。しかも、日本は経済的・物質的に豊かになり、外国との関わりも深くなってきている。あらゆる場で「国際化」が叫ばれるようにもなった。それ故に、自国の文化や伝統への尊重、ひいては外国の文化等に対する配慮が一層重要視されている。

学習指導要領では、わが国の文化と伝統を尊重する態度の育成を重視するとともに、世界の文化や歴史についての理解を深め、国際社会に生きる日本人としての資質を養うことを重視している。沖縄県の教育主要施策でも国際理解教育の推進を掲げている。

これまで受け持ったクラスで、アフリカについて話し始めると子ども達は黒人の話題になり、「黒人ってこわい。」とやや嘲りを含んだ口調で盛り上がった。無意識のうちにアフリカの人を差別する子が少なくない。ケニアや南米などの開発途上国と呼ばれている国の人々だって、人間はみな同じなんだということに気づいてほしい。そうすれば、途上国の人々に対する蔑視がなくなり、学級内でも仲間はずれがなくなるのではないだろうか。その思いを持って、これまで途上国理解を通して人間理解・人権尊重へつなげていきたいと、学級活動で国際理解教育を試みてきた。

外国語でのあいさつを調べ歌にする、ニュースを利用して世界地図で国さがしや国旗調べをする、メニューをもとにしたクイズ等である。しかし、これらは、狭い範囲での見方や取り上げ方であり、それらを教科のねらいと結びつける指導ではなく、場あたりのであったため、一つ一つのテーマが孤立していた。子ども達は興味を持ち楽しんで飛びつきはするが、その意識を国際理解へとつなげ高めていくことはできなかった。

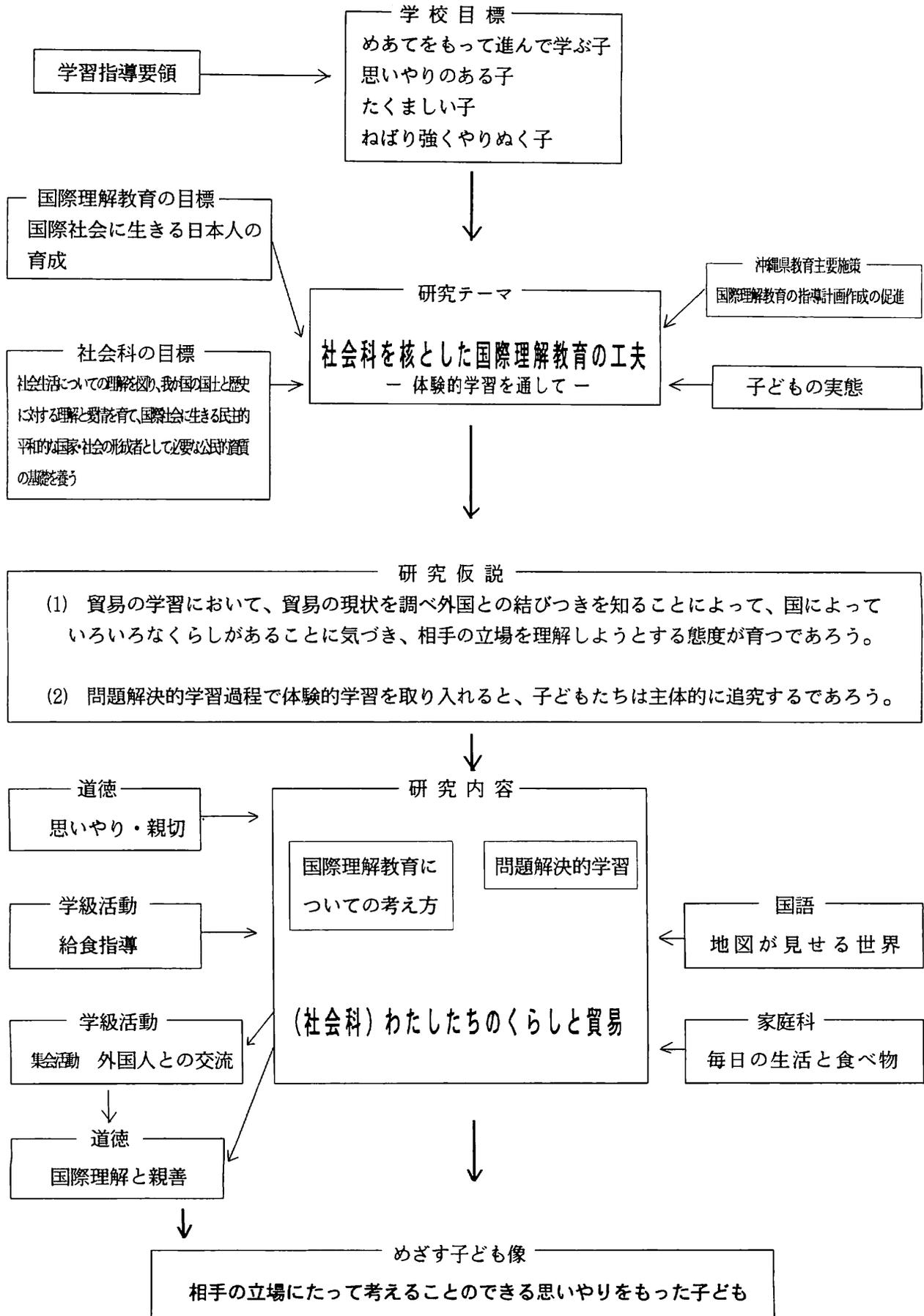
国際理解教育を進めるうえで、きちんとした教科や教材の中で位置づけをする必要性を痛感していた。国際理解といってもその懐は広い。しかし、5年生の社会科をみると産業と貿易の学習がある。あらゆる産業において、日本と外国との関わりは深い。また、わが国の貿易は原材料を外国に依存し、製品を輸出するという加工貿易である。輸入なくしては、食も成り立たないし、工業製品もつukれない。つまり、日本の産業は、外国との交流を抜きにしては成り立たない状況である。そこで、貿易相手国や輸出入品目、額を調べることによって、日本の貿易の特色がわかり、貿易相手国はじめ世界の国々と協力していく必要性に気づくのではないか。さらに、日本と貿易相手国とのつながりから、外国のくらしの様子を知ることによって、国によっていろいろなくらしがあることに気づくであろう。

よって、わたしは、貿易の学習を通して外国のくらしに触れさせれば、外国に親しみをもち、ひいては相手の立場に立って考えることができる子になるであろうという考えから本テーマを設定した。

II 研究仮説

- 1 貿易の学習において、貿易の現状を調べ外国との結びつきを知ることによって、国によっていろいろなくらしがあることに気づき、相手の立場を理解しようとする態度が育つであろう。
- 2 問題解決的学習過程で体験的学習を取り入れると、子どもたちは主体的に追究するであろう。

Ⅲ 研究構想図



IV 研究内容

1 国際理解教育についての考え方

(1) 意義

今日の社会情勢は、情報化・交通手段の発達により、国際的な関係はますます深まり、それによっておこる経済摩擦の問題がある。また、科学の進歩による地球的規模の問題（環境、エネルギー）や貧困、人権、人口、難民などの解決のためにも国際的な関わりが求められている。

今大切なことは、自分の考えをしっかりとちつつも、他の考えにも耳を傾ける、相手を理解しようとするところである。そうすることで、共に協力して国際的諸問題の解決を図ることができるのではないだろうか。つまり、国際的視野をもった人間の育成・地球社会の一員としての自覚をもち、自由と責任を持って行動できる人間の育成に努めねばならないであろう。

子どもたちは、十分な知識も得られないうちから、マスメディアの情報により考え方が形成される傾向が強い。だからこそ、物事を一面的でなく多面的にみることができるようにするための基礎を子どもたちの心の中に築いていく必要があると思う。

(2) 内容

国際理解教育とは、外国人と交流すればよいというものではない。外国の文化等を知識として得るだけのものでもない。外国語を習得するだけのものでもない。

わたしの考える国際理解とは、自己実現ができると同時に、他者に対する理解、特に、開発途上国に対しての誤認と憐れみで、「日本に生まれてよかった」「その場にいらなくてよかった」という意識をなくし、相手の立場に立って思いやることができること、また、異を排斥するのではなく、違いは違いとして認めることである。

そういう人間であれば、外国に対して異民族・異文化に対してだけでなく、自分以外の他者すべてを認めることができるであろう。この人間理解・人権尊重こそが国際理解の根底をなすものだと考える。

では、小学校における国際理解とはどんなことであろう。

外国の文化・習慣・くらしなどを知ること、自分のくらしと対比させながら異質なくらしや価値感を認めることができれば、達成できたと私は考える。

さらに、生活科や社会科の中で、低・中・高学年に分けて考えてみた。

低学年……地域・日本の文化や外国の文化に触れることで、自分の回りの生活や社会との関わりに興味をもつことができる。

中学年……地域の文化やくらしを理解し、外国と異なることを理解することができる。

高学年……産業や歴史を通して日本と外国の結びつきを理解するとともに、地域や外国の文化を尊重することができる。

国際理解教育をすすめるには、次に述べる五つの項目を相互につなげることが大切である。

図1に、それらのつながりを表してみた。

これらのことを学校教育で進める場合には、各教科、道徳、特別活動、日々の生活指導等の全教育活動の中で取り入れていくと効果があると思う。

そこで、教科への位置づけを表1のようにまとめてみた。

図1 国際理解教育の項目のつながり

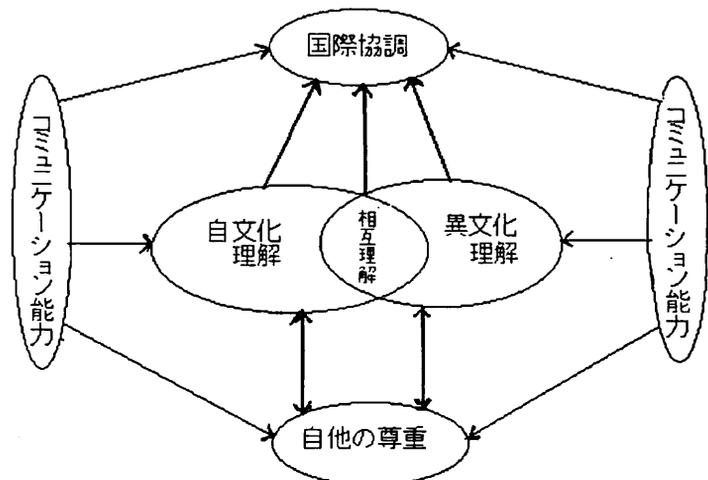


表1 国際理解教育の教科への位置づけ

項目	ねらい	学年	指導できる教科・単元	(-は、同時期に指導する単元)
自文化理解 自己理解	自分の関心をもとに、自分自身や日本の国土・歴史・文化伝統のもつよさや価値に気づくとともに、理解を深めようとする能力や態度を育てる。	3	わたしたちのくらしとまち(社) - ひびけ歌声(音) 市の人たちのくらしとうつりかわり(社) - もちもちの木(国) - かさじぞう(音) そろばん(算)	
		4	ひびけ歌声(音) - 吉四六話(国) くらしの広がり(社) - もみじ(音) 国土とさまざまな土地のくらし(社) - 方言と共通語(国) ごんぎつね(国) - つるのおん返し(音) - しゅ算(算)	(道徳) 郷土愛 愛国心
		5	伝統に生きる工業(社) - 大造じいさんとガン(国) - 鑑賞(日本の美術・絵巻物)(図) - 日本のふし(音)	
		6	人のくらしと歴史(社) - おぼろ月夜(音) - われは海の子(音) 狂言のおもしろさを(国) - 山田耕作の作曲(音) - エイサー(体) やまなし(国) - ふるさと(音) - 春の海・越天楽今様(音)	
異文化理解 他者理解	自分とは異なる見方や考え方、外国や他の民族の生活や文化等に関心をもち、それらを尊重しようとする能力や態度を育てる。	3	ゆかいなまきば(音) - フォークダンス(体) - エルマー、とらに会う(国) - カエルのルンバ(音) 三年とうげ(国) - いるかはざんぶらこ - ひょうしを感じて(音)	(学活) 集会活動
		4	アマリリス - いろいろな木の実 - ジャマイカ - ルンバ(音) フォークダンス(体) - 世界に目を向けて(国) - ちびっこカウボーイ - 冬の歌(音)	
		5	月夜のみみずく - 麦畑(国) - 重奏・合奏のひびき(音)	(道徳) 国際理解と親善
		6	音楽のしくみ(音) - 鑑賞(ジョーの振り)(図) - アジアの音楽(音)	
自他の尊重	自分や自分と異なる考えや立場を尊重しようとする能力や態度を育てる。 他に対する思いやりの心を育てる。	3	チョウを育てよう(理) - 虫のゆりかご(国)	(道徳) 生命尊重 自然・動物愛護 思いやり・親切
		4	カブトガニを守る(国) - 生き物の一年をふりかえて(理)	
		5	公害を防ぐ努力(社) - 動物と人の誕生(理) - 体の発育と心の発達(保体)	
		6	家庭生活と生活時間(家) - わたしたちの生きる今(国) - ゆずり葉(国)	(学活) 話し合い活動
国際協調 相互依存 相互協調	世界平和の重要性の認識と貢献しようとする態度を育てる。 互いのつながりに目を向け、関わりの深い人々や国々と協力協調して、よりよくしていこうとする能力や態度を育てる。	3	市の人たちの買い物(社) - ちいちゃんのかげおくり(国)	
		4	一つの花(国) - いろいろな土地のくらしとわたしたちの国土(社)	(道徳) 自然愛・環境保全 国際理解と親善
		5	わたしたちのくらしと貿易(社) - 地図が見せる世界(国) - 毎日の生活と食べ物(家) 見直そうわたしたちの国土(社) - 一秒が一年をこわす(国) - 身の回りを整えよう(家)	(児童会活動) ユニセフ 赤い羽根募金
		6	自然を見つめて(国) - 守るみんなの尾瀬を(国) 世界の中の日本(社) - 言語と文化のつながりを考えて(国) - 人とかんきょう(理)	
コミュニケーション能力 自己表現力	自分の思いや考えをしっかりとち、多様な方法で表現する能力を育てる。 相手の意見を聞き、判断する能力や互いに意志疎通できる能力を育てる。	3	創造をふくらませて(国)	
		4	書きたいことを整理して(国) - 思いを重ねて(図) - げきをしよう(国)	(道徳) 個性の尊重
		5	ほっとするとき - 粘土からでてこい(図) - 毎日をより楽しく(国) - 表現運動(体) 調査したことを(国) - 物語と音楽(音)	(学活) 話し合い活動
		6	生活を見なおして(国) だんボールアート(図) - 今、わたしは、わたしたちは(国)	

2 問題解決的学習

国際理解教育を進めるうえで、問題解決的学習を取り入れるとより効果がある。市川博は、『社会科と生活科における国際理解』の中で、「自己の興味・関心を主体的の追究し、集団の場で検討し、よりよいものを生み出すという共存の関係を育てる基礎である。」と、問題解決的学習の大切さを述べている。そこで、貿易の学習において、シュミレーションゲームで導入をし、資料やインタビューで追究していき、新聞にまとめるという問題解決的学習を取り入れた。

問題解決的学習とは、子ども自ら問題を見つけ、自分なりに考えたり判断したり体験したり表現したりしながら、問題を解決していく学習方法である。この方法は3つの場面に分けられる。

①問題をつかむ場面

きづく……………事実の提示により、驚きや疑問、矛盾を感じ、問題意識をもつ。

つかむ……………学習問題をつくる。

たてる……………予想をだし、調べる計画をたてる。

②問題追究の場面

しらべる……………問題解決に必要な情報を集め、調べる。

たしかめる……………集めたものをもとにまとめる。

ふかめる……………各自の考えを出しあい、比較したり関連づけたりして、認識を深めていく。

③まとめる場面

まとめる……………追究してわかったことを新聞や紙芝居などにまとめる。

とらえる……………新しくわかったことをつなげて結論とする。

ひろげる……………結論を他にもあてはめる。新たな問題を見つける。

子ども自らが問題を見つけるようにするためには、社会的事象を自分自身や自分の生活との関わりから調べ、さまざまな疑問や問題意識をもって社会的事象の意味を明らかにしようとする追究へのエネルギーをもたすことが大切であろう。そのためには、教師が学習への意識をうながす教材の開発と子どもの意識や考えをゆさぶる発問の工夫をしなければならない。しかし、現代の子どもたちは一般的に、回りから指示されないと行動できない、進んで意欲的に取り組もうとしない、知識はあるが、実際の生活に結びついていないという傾向がみられる。

そこで、体験的活動を組み入れると、子ども自ら課題を解決できるようになり、体験する喜びも味わうことができるようになるであろう。この体験的活動は、問題解決的学習のそれぞれの場面に組み入れることができる。

①問題をつかむ場面……………さまざまな疑問や感想などを出しあったり、不十分さや問題点などに気づいたりしながら自分の問題を見だし、その後の学習に対する関心や意欲を高めることができる。

②問題追究の場面……………新たな社会事象に接し、事実の認識を深めたり、自分の思いや気持ちを発揮したりして、自分の疑問や予想が確かめられ、社会的なものの見方や考え方を深めることができる。

③まとめる場面……………学習のねらいとしているものを自分なりに最終的に獲得し、定着を図る。学習の成果を整理するだけでなく、今後に残された問題を明らかにすることができる。

このように、体験的活動を問題解決的学習で意図的・計画的に取り入れることで、個々に応じた問題を設定し、自ら課題を追究し、自分なりの表現活動をし、発表することができるであろう。

V 授業実践

1 単元名 わたしたちのくらしと貿易

2 単元設定の理由

(1) 教材観 省略

(2) 児童観 省略

(3) 指導観

社会科の教科書を見ると、外国とのつながりが見える部分（国際理解教育とだぶる部分）は、食料生産や自動車工業の後にでてくる。もっとも有効である貿易は、交通といっしょの単元である。

国際理解を深めるために、外国との相互依存関係をもっと前面にだそうと「運輸や貿易にたずさわる人々」の中から貿易だけを取り出し、「これからの食料生産」とをひとつにして、自主単元「わたしたちの暮らしと貿易」を構成してみた。

この単元に入る前に、国語で「地図が見せる世界」を学習し世界地図や地球儀に慣れさせておく。

導入には、『新しい開発教育のすすめ方』（開発教育推進セミナー）の「貿易ゲーム」を学級の子どもたちができるように手直しして、「お金もうけゲーム」と命名し実践する。このゲームを通して加工貿易を疑似体験させることで、子どもと関わりが薄い貿易のイメージ化を図りたい。同時に、技術のある黒字国と原料しかない赤字国との間で不公平感や「一生懸命取り組んでももうからない。」「何か変だぞ。」という思いを持たせることで、学習問題へとつなげていきたい。

学習問題の追究場面では、ジェトロ（日本貿易振興会）、貿易協会、沖縄県商業貿易課、アメリカ総領事館、貿易会社等の連絡先を教え、図書資料や自作資料も準備することで、自主的な調べ学習をさせたい。この段階で、家庭科「毎日の生活と食べ物」や給食指導の中で、食べ物調べや食材に輸入品があることに着目させ、身近な物と外国が結びついていることを協調する。

こうして調べたことをミニ新聞にまとめ、視点を提示してチャンピオンを決めることで貿易の現状をおさえ、まとめとしたい。そして、その中からでてきた疑問を直接外国人にぶつけることで、その国の様子や暮らしに触れさせ、異文化への理解を図りたい。外国人を招待する前に、道徳で「思いやり・親切」を取り上げ、相手の立場や気持ちを考えることの大切さにせまりたい。

社会科学習に引き続き学級活動で交流会をもち、あいさつを覚えてもらったり、ゲーム「フルーツバスケット」を工夫した「貿易バスケット」をすることで、外国の言葉や外国人に触れ合わせる。

こうして外国に親しくなった後日、もう一度道徳で「国際理解と親善」を取り上げて、国際理解を深めていきたい。

3 単元の指導目標

(1) 観点別指導目標

① 社会的事象への関心・意欲・態度

「お金もうけゲーム」を通して、貿易について関心を持つことができる。

貿易相手国や輸出入品目等について意欲的に調べることができる。

外国に対して興味を持って質問したり、答えを聞いたりすることができる。

② 観察・資料活用の技能・表現

学習問題にそって、資料を読み取ったり、調べたことをまとめたりして発表することができる。

③ 社会的な思考・判断

貿易や産業が外国と深い関わりがあることに気づくことができる。

貿易の様子から、相手国の生活について自分なりの考えを持つことができる。

日本の技術協利に気づくことができる。

④ 社会的事象についての知識・理解

貿易の特色について理解することができる。

外国との結びつきを理解することができる。

貿易に従事している人の苦労や工夫がわかる。

4 単元の指導計画

時	ねらい	学習内容 教師の支援	その他 ◆社会科以外の教科										
つかむ	1 ・「お金もうけゲーム」をすることで、貿易についての関心を高める。	1. グループが国になって原料や製品の売買をするゲームにより、貿易の大まかなしくみを知る。 2. 「お金もうけゲーム」を通して、不公平さに気づく。 ☆どうして不公平なのか考えさせる。 ☆日本は、ゲームの中のどの国にあたるか予想を立てさせる。 3. 気づいたことや思ったことを書く。	準備 ・ゲーム用物 定規はさみのり、紙、用紙、お金の型 ◆「地図が現れる世界」で図や地蔵を使い、地図に慣れさせておく。(国語) ・ノートに書く。										
たてる	2 ・「お金もうけゲーム」で気づいたことや疑問に思ったことをもとにグループの学習問題を作る。 予想される問題 <table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td>・日本は、どんなものを輸入したり、輸出したりしているのか。</td> <td>・日本は、貿易でどの位もうけているのか。</td> </tr> <tr> <td>・日本と貿易している国はどこどこか。</td> <td>・沖縄でも輸出入があるのか。</td> </tr> <tr> <td>・一番たくさん輸入しているのは何で、どれくらいか、どの国からか。</td> <td>・沖縄のさとうきびは、輸出しているのか。</td> </tr> <tr> <td>・一番たくさん輸出しているのは何で、どれくらいか、どの国へが多いか。</td> <td>・働いている人の苦勞や工夫</td> </tr> <tr> <td></td> <td>・貿易で困ることはないか。</td> </tr> </table>	・日本は、どんなものを輸入したり、輸出したりしているのか。	・日本は、貿易でどの位もうけているのか。	・日本と貿易している国はどこどこか。	・沖縄でも輸出入があるのか。	・一番たくさん輸入しているのは何で、どれくらいか、どの国からか。	・沖縄のさとうきびは、輸出しているのか。	・一番たくさん輸出しているのは何で、どれくらいか、どの国へが多いか。	・働いている人の苦勞や工夫		・貿易で困ることはないか。	4. 特に調べてみたいことを決める。 ☆ねらいからずれた学習問題については、方向性を示して単元の目標に迫る学習問題となるように机間指導をする。	・ノートに書く。
・日本は、どんなものを輸入したり、輸出したりしているのか。	・日本は、貿易でどの位もうけているのか。												
・日本と貿易している国はどこどこか。	・沖縄でも輸出入があるのか。												
・一番たくさん輸入しているのは何で、どれくらいか、どの国からか。	・沖縄のさとうきびは、輸出しているのか。												
・一番たくさん輸出しているのは何で、どれくらいか、どの国へが多いか。	・働いている人の苦勞や工夫												
	・貿易で困ることはないか。												
追究する	3 ・いろいろな方法で学習問題を解決する。 4	5. 資料集や教科書、図書資料や教師の自作資料から解決する。 関連機関や会社に問い合わせたりして、解決する。 ☆図書の紹介をする。 ☆教師の自作資料を提示する。 ☆ジェットロ(日本貿易振興会)や沖縄県商業貿易課、アメリカ総領事館、貿易関連会社の連絡先を教える。	準備 ・書籍、資料集、図書資料、自作資料 ・各機種の電話番号 ・地図、地蔵 ◆給食で使われている鉢の中に入れてあるものをさがす(学活 給食指導)										
まとめる	5 ・調べたことをミニ新聞にまとめ新聞チャンピオンを決める。 ・日本の貿易の特色を知る。	6. 調べてわかったことをミニ新聞にまとめ、チャンピオンを決める。 ☆視点を決めてチェックさせる。 (文字の大きさや読みやすさ、見出し、わかるような工夫、わかったこと) 7. チャンピオンの発表で、日本の貿易の特徴を確認する。 (自給率、加工貿易、輸出入相手国、品目、従業者の苦勞と工夫、貿易課) ☆チャンピオンの内容で不十分なものは補足する。	◆「毎日の生活と食べ物」で、日常の食生活の中からは輸入しているものはどれか考えさせる。(家庭科) ・用紙、マジック ◆ミニ新聞の印刷と審査は、課外に行う。(課外)										

ひろげる	6	・日本と貿易している国の実際を知る。	8. 教室に外国人を招き、調べて疑問に思ったことを聞く。 ☆自分なりの予想をもたす。 9. 話を聞いてわかったことや思ったことをまとめる。	◆外国人を迎える前に、相の立場立って行動することを指導しておく。(道徳) ・ノートに書く。 ◆次時、外国人と交流会を持ち、外国について理解しようとする意識づけとする。(学活) ◆「国際理解と親善」で、途上国理解を図る。(道徳)
	本時			

5 本時の指導計画

(1) 単元名 わたしたちのくらしと貿易

(2) 本時の目標

日本とキューバやガーナの貿易の現状を知ること、世界にはいろいろな暮らしがあることを理解させると同時に、日本は技術協力もしていることに気づかせる。

(3) 授業仮説

貿易について調べてきたことを確認しあう中で、でてきた疑問を直接外国の人に答えてもらえれば日本と外国との生活を比べることができ、外国のことを理解しようとするであろう。

(4) 準備するもの

写真(技術協力)、ミニ新聞(キューバについてまとめたもの)

5 展開 6/6

過程	学習活動	教師の支援 ○発問 ☆支援 ◇学習材	評価の視点と方法
つか2 む分	1. 学習のめあてを確認する。	○新聞チャンピオン第一位の発表を聞こう。	
追究する 33分	2. 新聞チャンピオン第一位の発表を聞く。		<ul style="list-style-type: none"> ・自分の考えを持つことができる。(思考・判断) 観察、ノート ・キューバに興味を持って質問したり、答えを聞いたることができる。(関心・意欲・態度) 観察 ・ガーナに興味を持って、質問したり、答えを聞いたることができる。(関心・意欲・態度) 観察
	3. 発表からでてきた疑問に対して、理由を持って予想をたてる。	○浩さんの発表の中(はでな)についての予想がありました。みなさんはキューバの人たちはどんな生活をしていると思えますか。自分の予想を書いてください。その理由も書いてください。	
	4. 予想を発表する。	☆導入「お金もうけゲーム」を思い出させ、また自分のくらしと比べて予想させる。(仲間指導)	
	5. 外国人を迎え、自己紹介を聞く。	○キューバの人たちはどんなくらしをしているのでしょうか。	
めとる	6. キューバについて調べる。 (1)質問をだす。 (2)ベルキスさんの答えを聞く。		
	7. ガーナについて調べる。 (1)質問をだす。 (2)クレメントさんの答えを聞く。	○ガーナについては真美さんが軽身について調べたことを話しました。他に聞きたいことはありませんか。 ☆外国に日本人が技術を教えるに行っていることにも触れる。 海外での技術協力の写真パネルを掲示する。	
めとる	8. わかったこと、思ったことをまとめる。	○思ったことやわかったことをノートに書いてください。	・キューバとガーナの様子がわかる。(知識・理解)

10分	9. 感想を発表する。 10. お礼を言う。	興味のある国のくらしや文化についてはさらに発展として自分で調べるように奨励する。	ノート
-----	---------------------------	--	-----

6 授業の考察

本時で外国人が教室に入った時の子ども達は目を輝かせ、通訳を介して真剣に質問したり、答えを聞いて、メモしたりして集中していた。(写真1、2)

授業でわかったことを次のようにまとめてあった。

- ・日本はキューバからたくさん輸入しているので金持ちだと思ったけど、みんな小さな家に住んでいてまずしいと言っていたのでびっくりした。
- ・キューバが沖縄より暑いと聞いてびっくりした。だから、せんぷうきもたくさんついている。
- ・キューバは暑いので、風とおしのいいようにしていることがわかりました。
- ・カカオは木にできる。・ガーナは海があるけど、プールより海で泳ぐほうが多いそうです。

このように、キューバやガーナの様子を沖縄と比べながら話をきいていたことがわかる。

しかし、新聞発表した資料を全体にわかるようにして質問につなげると、もっと貿易からくらしへと結びつけることができた。また、もっと沖縄のくらしと比較させるように教師が発問したり、板書したりしてさとうきびや生活の様子に質問をしほれば、理解も深まったと思う。

授業後は、一人の子がサインを要望すると、全員がノートを持って二人の前に列をなし、サインをもらったり、握手を求めたりしていた。(写真3)



写真1

写真2

写真3

このような授業の様子から、直接外国人に接することは、国際理解の最適な方法だといえる。この単元を通してふりかえると、日本の貿易について追究する段階で次のような感想があった。

- ・日本は、原料を輸入して製品にして輸出している加工貿易だ。
- ・輸入している品物は、数えきれないほどあることがわかってびっくりした。
輸入した物がけっこう身近にある。日本は、世界中の多くの国と貿易している。
- ・いろいろな国と貿易している。もし貿易できなかつたら日本はほろんでしまいそうだ。
- ・輸出でもうけたお金が10兆円もある(9年度)けど、相手の国のことも考えなきゃいけないと思った。
- ・日本や沖縄の貿易を学習したので、次は、他の国の貿易についても調べてみたい。

この段階で、日本が外国と相互依存していることに気づき、さらに、導入ゲームの不公平感がずっと残っていて、「相手のことも考えなければ・・・。」につながり、相手国との関係にも目を向けていることがわかる。

VI 研究の成果と今後の課題

1 研究の成果

(1) 貿易の学習において

貿易の学習を通して相互依存関係に気づき、外国との結びつきを考え、さらに外国人と接することで、子どもは、「外国人はこわいというイメージがあったけど、とてもいい人でした。」のように、外国はこわい、危険という認識から視野が広がっていった。

また、道徳でも「貧しい国の人たちにできることは何だろうか。」と真剣に考え、交流後は、「ことばは通じなくても心と心の結びつきで友だちになれた。」と感想もあった。外国人やその国の生活の様子を知ったことで、思いやりの心も育ってきたようである。

(2) 体験的学習

アンケートの結果を見ると、次のような変容がみられた。

表2 学習前と学習後の児童の意識調査（調査人数37名）

質問事項	学習前(%)	学習後(%)
社会科が好き	53	81
外国人と友だちになりたい	50	84

社会科が好きな子の理由は、ゲームをやった、たくさんの人に話を聞いた、外国の人に教えてもらった、新聞を作ったとなっている。このことから、問題解決的学習に体験的学習を取り入れることで社会科が好きになり、勉強が楽しくなった子が増えたことがわかる。

自ら課題を作り調べたことで、ガーナやキューバの貿易について調べたい、他の国（ブラジル、米国）についても調べたい、大人になったらキューバに行って子どもたちに日本のことを紹介したいと新たな追究意欲も芽生え、外国への視野が広がった。

2 今後の課題

(1) 5年社会科の貿易の単元から発展して国際理解教育を進め、相互依存関係へとつなげていけたが、社会科を核として進めていったので、異文化理解へとつなげるのには無理があった。関連する単元を集めるだけでなく、総合的な学習として単元構成していくように研究を進めていきたい。

(2) 授業実践では、沖縄国際センターの研修生と琉球大学の留学生に協力してもらえたが、制約があり調整が難航した。

国際理解教育を推進するのに、外国人との交流は有効なので、いかに学校教育への人材活用を図っていくかは地域だけでなく、県や国レベルでの検討も必要ではないだろうか。

<主な参考文献>

市川博編	『国際理解教育と教育実践』	エムティ出版	1994年
開発教育推進セミナー編	『新しい開発教育のすすめ方』	古今書院	1995年
三浦健治編	『国際理解教育の進め方』	教育出版	1996年
北俊夫編	『外国とのかかわりを調べる授業』	国土社	1997年
厚木市教育研究所	『国際理解教育に関する調査研究』		1996年
文部省	『新しい学力観に立つ社会科の学習指導の創造』	東洋館出版社	1993年